

化学研究所若手研究者国際短期派遣事業の支援のもと、2013年2月9日~2013年3月25日の日程で、ドイツ・Dresdenに研究滞在させていただきました。Dresdenは、Max-PlanckやFraunhoferなど研究機関も多数あり、近年、半導体ナノテクノロジーの研究拠点となっている都市です。今回、私はThe Leibniz Institute for Solid State and Materials Research Dresden（通称IFW-Dresden；<http://www.ifw-dresden.de/>）のO. G. Schmidt教授の研究グループに滞在させていただきました。IFW-Dresdenは500名くらいの研究機関ですが、年間約100名程度のゲストが数週間~数カ月滞在しているそうです。Schmidt教授がdirectorを務めるInstitute for Integrative Nanosciencesは、物理・化学・バイオ系の研究者・大学院生からなる「ミニ化研」のようなメンバー構成で、約80名の構成員が蓄電池から量子情報まで半導体ナノテク材料に関連した学際的な課題について連携して取り組む研究チームでした。



印象的だったことは、グループメンバーが非常に国際的であった点です。ディレクターの教授こそドイツ人でしたが、チームリーダー・大学院生ともに過半数がドイツ国外の出身者でした。大学院生に聞くと、directorが著名なことに加えて、ドイツは米国よりも入学手続きが容易なことがドイツの大学に来る動機となったそうです。このあたりのサポート体制の充実も国際競争に勝ち抜く重要なポイントなのだと思いました。私の滞在研究をサポートしてくれたのもオーストリア、ポーランド、中国から来ていたPDの人たちで、彼らとは研究課題について非常に突っ込んだ議論を行うことができました。今後も研究交流を継続する上での糧になりそうです。

また、ドイツ人は勤勉であるというイメージは持っていたのですが、スタッフ等は8時前には出勤するのが標準的なことにも驚きました。少し年輩の方からは、以前はもっと早くから仕事を始めていたとも伺いました。その分、帰宅時間は午後3-4時と非常に早いので、4時以降には事務やテクニシャンの人が捕まらないという困難も見受けられました。一方、大学院生は9時-18時くらいの生活で割とのんびりした生活なようにも見えました。しかし、同室の大学院生に言わせるとdirectorからのきついプレッシャーがあるとのことで、相当の集中力を要するようです。この点は万国共通なのかもしれません。

ドレスデンの今年の冬は、例年になく長い冬でした。ようやく春を迎えた日には帰国となりました。町の中心にはエルベ川が流れており、晴れた日にはたくさんの人たちが川沿いを散歩します。ドレスデンは旧東ドイツの都市で唯一人口が激増している街（ベルリンはのぞく）で、街の雰囲気からも今後も益々発展してゆく都市の一つだと感じられました。今回、異なる環境で生活し研究を行ったことは、様々なことを考え直す貴重な機会となりました。今後も多くの大学院生や若い研究者がこのような機会を得られるよう、本事業が継続することを願います。



最後に、このような貴重な経験をさせていただいた化学研究所およびIFW Dresdenの関係各位に感謝いたします。